通信第七十四号　ご

　　南無阿弥陀仏の廻向の

　　　恩徳広大不思議にて

　　　の利益には

　　　に廻入せり

　　往相廻向のより

　　　還相廻向の大悲をう

　　　如来の廻向なかりせば

　　　浄土の菩提はいかがせん

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

　私が寺にいる時は毎朝大石先生ご夫妻の永代供養墓の前で、願生偈とご和讃を読経させて頂いています。ご和讃はその日に浮かんできた和讃にしていますが、先の二のご和讃がずっと続いています。心のわだかまりが消され、新しい力が湧いてくるからです。

　南無阿弥陀仏さまは如からる、御廻向であります。が如、浄土であります。の私達とは反対方向であります。人間が称えるのであれば自力の念仏であります。転換がありません。

　親鸞さまは

「来迎」というは「来」は、浄土へ来たらしむという。～～　穢土を捨てて、真実報土に来たらしむとなり。すなわち他力をあらわすことなり。また「来」は、かえるという。かえるというは、願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを、法性のみやこへかえるともうすなり

　聖典５４９頁

　帰る世界、りの浄土の世界を私は大石先生からお導き頂いたのです。それまでは穢土しかない、この世しかない在り方に何の疑問もなく悪戦苦闘していた毎日でした。

さらに生まれる前からの迷いの流転をくり返してきたなどとはまったく眼中にありませんでした。死んだらおしまいだ、何とか生きているうちに生存競争の中で落ちまい、何とかして這い上がろうとしてきたのです。宗教の世界に入ってからも、長い間、他力の中の自力心でこちらから這い上がろうとする本能は簡単に断ち切れるものではありませんでした。歎異抄にも

よりいままで流転せる苦悩のはすてがたく、いまだうまれざるの浄土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩悩のにそうろうにこそなごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、力なくして終わる時、かの土へは参るべき成り

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典６３０頁

残念無念と思っている時は、まだ娑婆の縁が尽きていない時です。自分の可能性を信じています。釘を磨いて釘の力で磁石に成れると思いあがっているのです。しかし、これをたれることは死を意味しますから本能的に拒絶します。大石先生にお育てを受けながら、深いところでずっと私は大石先生を拒絶していたのです。人間、大石先生に引っかかって自分と比べて反抗していたのです。背後の如来廻向のおはたらきが見えなかったからです。

如来さまのご廻向なしに私が浄土へ向かう事はあり得ないことです。私に微塵でも浄土の菩提心があったなら、私の菩提心を拠り所としますから私は常に行き詰まり、挫折を繰り返し、娑婆の業の渦の中で、義理人情に流され疲れ、人を怨み、人生をい、悔み、しい日々を送っていたにちがいありません。そこから抜け出し救い取って下さるのが如来のご廻向であり、ご廻向からの大石先生であったのです。今でもそうであります。

この頃はご法座の日が続いています。前もって用意することもあまりできません。ところが、その日の朝二時、三時ころに目覚めてご法話の内容が降りてきます。ご廻向です。正観寺さんの彼岸会の早朝でした。

「如来の往相廻向によって私に如来が来て下さり、如来の還相廻向に乗せられて浄土へ往生させて頂ける。また、娑婆に帰らせられる。如来さまと共に歩まされる新しい人生」とのご廻向がありました。

　正観寺彼岸法要のご法座が終わり、講師部屋へご住職がころがるように入ってこられて「南無阿弥陀仏は弥陀廻向の法ですね」とうれしそうに呼びかけて下さいました。

住職さんは法話の中で強調した親鸞さまのつぎのご和讃に共鳴されたからでありましょう。

　真実信心の称名は

　　弥陀廻向の法なれば

　　不廻向となづけてぞ

　　自力の称念きらわるる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典５０３頁

　念仏は申していると、念仏に力が入り自身の信心の方にはなかなか向きません。親鸞さまの当時からの二十願の深い問題であります。

長仁寺彼岸会は屋久島で三十年間、医師をされていた先生をお迎えして二日間、「いのちが求める医療と仏教」というテーマのもとシンポジウム（決めたテーマについて何人かが意見を述べ、参加者と質疑応答を行うこと）が開催されました。ご参詣された方から礼状を頂きました。輪読会へいつも来られる坊守さんです。

　　先日は彼岸法要のご縁を頂きましてありがとうございました。今元気な私はこの先、病気や怪我をする事はあっても死は「人や先、人や先」と他人事として捉えていました。

医師のご講師は初めてでしたがとても有意義でした。というのは姑が病気で亡くなった時、担当の医師が「御臨終です」とそっけない態度の一言で病室を出ていかれた時、医師は多くの人の死に直面されているので死イコール遮断。亡き人の何もかもを切り捨てた感覚で仕事をされるのかなと淋しい思いをしました。

講師の先生の死に対して、真面目で率直に向き合う気持ちと、その事を真宗の教えに求めようとする心に安堵と尊敬の念をいただきました。私たちは死んだらどこへ行くのか、死んでどうなるのかと死に対して恐れや不安をいだいた言葉を発します。

常照様が法話の中で、友松さんを見舞われた時「あとは如来さまにおまかせです」という言葉を聞かれたと話されました。友松さんは本当にお念仏をいただかれ、安心して阿弥陀様に身も心もおまかせできた言葉ではなかったかと受け取りました。死んだらとか、死んでとかでなく、「今、お念仏をいただく事が私自身に課せられた一大事ですよ」と聞かせていた

だいた今回の彼岸法要でした。　　後略

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大山　京子

ご門徒さんからも質問等がだされこれまでにない法要の在り方でした。市地先生は私と同年輩であります。今年、専修学院に入学され僧侶に成られるとのこと、これからの歩みが注目されることでありましょう。

さて、愛知県の刈谷本願道場の責任者であった、水本紀久夫さんが三月五日されました。八十三才でした。兄の健太郎さんの願いを継がれて法座を開いて下さっていたのです。二月十六日のご法座の時、調声の声が小さいなと感じました。咳が出ていたので次の日の三重県の松林寺本願道場の出席は無理と思っていましたら、来られました。そうとうに体調が悪かったはずです。途中で涙を流されていました。その時は不思議だなと思われました。「真如の世界、アマラ識の世界が今日は身に沁みた」という一言は、命がけでの一言であったのかと後になって思わされることです。兄の健太郎さんと同じく命を懸けた求道のあり方でした。悔いなく聞法を貫かれました。お別れして十七日目にお亡くなりになったので、私としては実感がありません。

　いのちかけ

　の君に

　信の

　悔いは残さず

　生ききりてあり

　と、弔電を送らせて頂きました。

　二十六日から二十八日にかけて、愛媛県から松田敏美さん、滝本美恵子さん、東京から百合子さんが泊まり込みの聞法にご来寺くださいました。

　お迎えするにあたり、掲示板に大石先生のお言葉をあげさせて頂きました。

一言のお念仏がお浄土で遇えるか、娑婆の出会いになるか。私は岐路に立たされているのです。

　大石先生ご夫妻が納骨されている供養墓の正面のお名号は先生の字であります。下段の壁面に「光あり」の歌詞が刻まれています。自然に歌を四人で歌いました。楫山さんが「先生に待たれ、迎えられた感じがします」と言われて泣かれました。必ず求道者が来られると願っていた私も少しもらい泣きしてしました。タイミングよく青い空のもと鶯の声がしました。お浄土で出遇わされるご縁と成らされました。

　夜遅くまでの座談、聞光道でのご縁、休養に近くの温泉にも行きました。無駄のない二泊三日がすぐにたちました。最近ご主人をなくされた円入マスミさんが食事の手伝いに来ておられましたが、座談を聞いていて、帰れなくなったとずっと加わって下さいました。聞光道のとき「本気で聞かんとならん」とされました。皆さんも私も嬉し涙がでました。これは想定外の有難い出来事でした。

翌日、フェイスブックにあげた大石先生の掲示板のお言葉に、三重県松林寺住職の森愚英さんからコメントがありました。ご本人の了解を得て掲載させて頂きます。

考えてみれば、今まで業の出会いしかしてこなかったと言えます。身辺に起こって来る事件は、私の業を引き出して頭が下がるまで関わって下さる、仏様のお手回しだったのですね。深い迷いに振り回されて、いつの間にか私は偉そうに振る舞い、相手を評価することに躍起になって生きて来た。これが私の本性ですね。それがあるから、明るく、深く教えられながら前を向いて、新鮮な毎日が少しずつ始まってきています。有難うございます。また、来月もよろしくお願いします。

五月十三日は大石先生の十七回忌です。森さんが「このご縁に先生の未発表の文章があれば発行したい。お金は自分がだす」ということでした。もちろん私は賛同しまして、四月中に、手元に一冊しか残っていない「生きていてよかった」の冊子と「念仏の親子」と題して、先生の父上様の「二十五回忌を迎えて」・「おばちゃんに寄せる」合冊版を出版するべく作業を進めています。

また、森さんを含めて五人で「光あり」の輪読会を始めるそうです。私には本願の火が燃え移って来たという感触があります。如来さまに、大石先生に使っていただく。有難いことです。

　お泊りの皆様がお帰りになった翌朝、本堂のお朝事のご和讃に親鸞さまの息づかいが感じられました。やはり真剣に二泊三日間どっぷり浸かった功徳でしょうか。それぞれの念仏同行さんのたのもしい歩みに励まされるこの頃です。

二〇二四年四月

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝